平成２５年度内閣府
国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業

実　施　報　告　書

はじめに

男女共同参画社会の形成は、広く国民に関わるとともに、あらゆる分野において推進すべきものであり、国のみならず地方公共団体、民間団体における取組の促進が極めて重要です。

このため内閣府では、男女共同参画社会づくりに向けての国民的な取組を推進するため、男女共同参画推進連携会議（※）及び同会議構成団体との共催により、男女共同参画社会づくりに資するテーマに関連したセミナーやシンポジウム、またこれらに類する研修会・学習会・出前授業等を「国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業」により実施しています。

このたび、平成２５年度事業の概要について、各共催団体が作成した実施報告がまとまりましたので、今後、男女共同参画の推進に関するセミナー等の企画・立案を検討の際には御活用ください。

（※）男女共同参画推進連携会議は、広く各界各層との情報・意見交換等を通じて、民間との連携ネットワークを形成し、国民的な取組を推進することを目的として、平成８年より開催しています。

内閣府男女共同参画局

目　次

１.地球社会を共に生きる～子どものまなざしから考えるワーク・ライフ・バランス～
.....P.4
（一般社団法人国際女性教育振興会等との共催）

２．女性の活躍で未来を拓く～多様なキャリア形成による経済社会の活性化.....P.8
（国際ゾンタ２６地区等との共催）

３.女性活躍推進を考えるシンポジウム in 福岡「女性の活躍で変わる、変える、これからの中小企業」
.....P.10
（中小企業家同友会全国協議会女性部連絡会代表等との共催）

４.再チャレンジを目指す女性のための『学びなおし教育』.....P.13
（婦人国際平和自由連盟日本支部等との共催）

５.女性はもっと活躍できる！～WEPs が変える仕事の未来～.....P.17
（特定 NPO 法人国連ウィメン日本協会等との共催）

６．女子中高生の医理系進路選択支援～医理系の研究って、すっごくおもしろい！～
.....P.20
（公立大学法人奈良県立医科大学等との共催）

７．企業×女性起業家×学生の出会いの場の創出
－WEPｓ（女性のエンパワーメント原則）の実現に向けて.....P.23
（国立大学法人お茶の水女子大学等との共催）

８.シンポジウム「理系の仕事～いつか未来を創るあなたへ～」.....P.26
（一般社団法人日本女性科学者の会等との共催）

９．女性技術者のエンパワーメント推進に関するシンポジウム
「女性技術者登用による産業競争力強化を目指して」.....P.30
（一般社団法人国立大学協会、一般社団法人技術同友会等との共催）

地球社会を共に生きる
～子どものまなざしから考えるワーク・ライフ・バランス～
（一般社団法人国際女性教育振興会等との共催）

１．開催趣旨・目的

未来を担う子どもの健やかな発育・成長のため、親をはじめとする大人の働き方・家庭生活を見直すために、静岡県内の幼児教育施設の視察から得たものと、国際女性教育振興会が行った海外視察から得た諸外国の実情を交え、子どもを中心に据えた保育・教育の充実「子ども目線でのワーク・ライフ・バランス」を考える。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

地球社会を共に生きる～子どものまなざしから考える　ワーク・ライフ・バランス～

３．日時・場所・参加者数

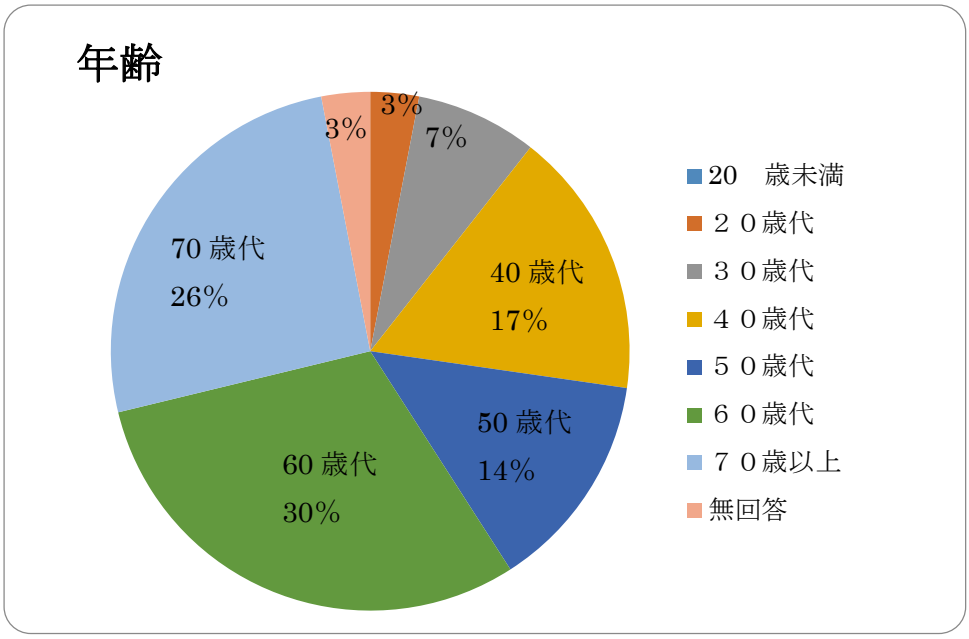
・平成 25 年 9 月 30 日（月）13：00～16：00
・静岡県男女共同参画センターあざれあ４階第一研修室（静岡県静岡市駿河区馬淵 1-17-1）
・91 名

４．プログラム

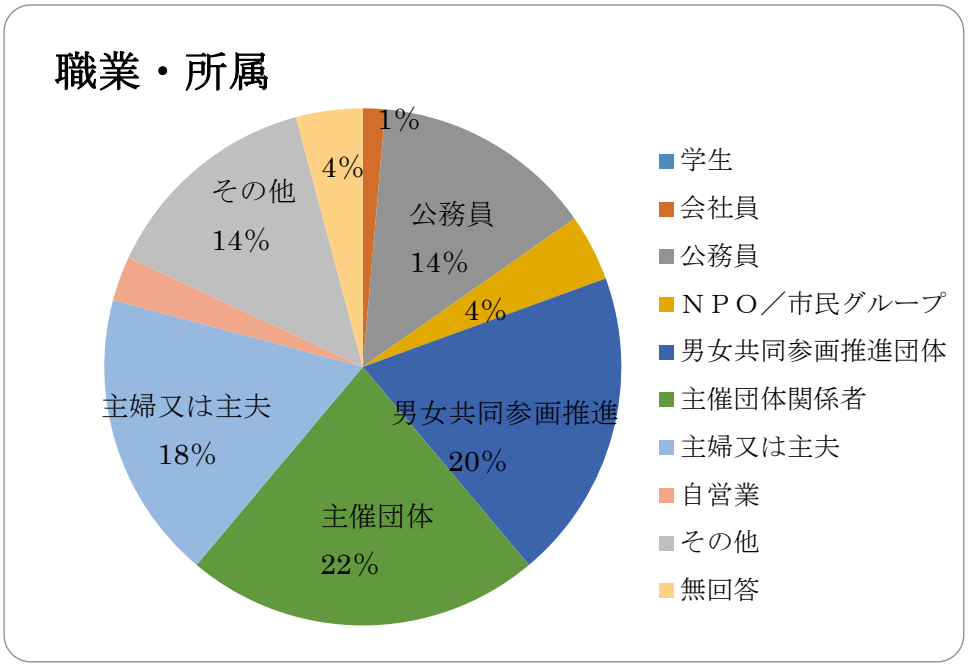
13：00～13：05　開会挨拶　鍵山　祐子氏　一般社団法人国際女性教育振興会代表理事
13：05～13：45　報告　「子どもの置かれている現状に視点をあてて～静岡県内の幼保園・認定子ども園の視察研修から感じたこと～」
黒柳　千穂子　一般社団法人国際女性教育振興会静岡県支部事務局長
13：45～14：30　対談　「子どもを取り巻く地域と幼稚園～スウェーデン・日本・静岡～」
飯野　紀代子　静岡県読み聞かせネットワーク会長（静岡県支部会員）
稲葉　昌代　　常葉大学短期大学部　保育科特任教授　附属とこは幼稚園長（静岡県支部会員）
14：30～14：40　休憩
14：40～15：40　講演「子どものまなざしから考える　ワーク・ライフ・バランス」
石原　剛志氏　　静岡大学教育学部教授
15：40～15：55　質疑応答
15：55～16：00　閉会挨拶　林　のぶ　一般社団法人国際女性教育振興会静岡県支部長

５．参加者からの主な意見

〇参加者の年齢



○職業・所属



○第１部について

・幼保園、認定子ども園等の課題をよく理解した。今後の取り組みを示されて、子育てに役立てたい。参考になった。

・行政と国との連携が子どもに影響を与えることが分かった。

・幼稚園のあり方がなかなか難しいと思っていましたが、いろいろお聞きして実感がわきました。

・現在の幼稚園・保育園・幼保園の現状がわかった。もう少し園の具体的な現状が分かると良かった。

〇第２部について

・人口規模や背景の異なるスウェーデンの教育や行政を取り入れるには課題もあるのかもしれませんが、素晴らしいヒントがたくさんあって、静岡に取り入れていけたら本当にいいなと感じました。対談者飯野さんの「地味で地道な活動の大切さ」という言葉が心に響きました。

・幼稚園ではマイオピニオンを持つ子どもの心を育てていきたい。女性が「長」でないと変えられないことが多い。スウェーデンから日本が学ぶべき事などとても共感した。

・幼児教育に限らず教師が変わっていかなければ子どもは変わっていかない、子どもが変われば保護者や地域が変わっていくことが分かります。教師自らが学びを進めていく必要を感じました。

・地域と国、またスウェーデンを参考にすべき点を考えることが出来た。もっと自分の地域について考えなければと思った。

〇第３部について

・報道、政治の知識、実体験など幅広い情報源からご説明いただき説得力がありました。「裁量労働制」は、ＷＬＢを難しくしていると思います。とくに、女性が大学教員になると、土日は研究する時間が取れない（家庭にとられる）ので、困難である。アメリカのように裁量労働制であっても子どもがいる人は男性も女性もいったん４：３０に帰宅につくことが必要。家族で夕食をとったあと、大人は仕事をすればよい。

・保育の「量」と「質」の確保。とても難しい課題があると思いますが、人の命を預かる場所である以上、先生のおっしゃる通り、非常に大切な目標であると思います。各方面の知恵を集める努力をするべき大事な問題です。

・父親、教育者としての先生の講演は大変心に響きました。実践なさっている若い世代の生活のお話が、自らの子育て時代を思い出させて下さり、我子の子育てはどうなっていくのだろう？という思いに至ってきました。

・最後の子どものことばから自分のあり方、ワーク・ライフ・バランスの大切さを気づかされたという部分が印象的だった。子どもを気にかける余裕が大切だと気付かされた。

・新しい保育制度改革はよく理解できましたが、質の問題が気になる。

〇全体について

・働く女性、社会進出をと、世の中変わりつつある中、子どもを取り巻く環境が遅れている事を感じます。子どもを産んで育てることをよく考えての社会づくりをしていきたいと思います。

・会場一杯の雰囲気が和やかだった。

・ＷＬＢにつては、大企業や公務員には早くから実現できても、零細企業やブラック企業などでは「叶わぬ夢」ですが、それが公的機関のチェック、監査が入ることによって少しでも進むように制度面の整備をぜひとも期待します。

・共働きしている両親を子どもがどう思っているのか、また、自分との日々の関わりについてどう感じているのか知りたかったが、ヒントをもらえました。

・今回の開催は男女共同参画局メルマガにより知って申し込みました。娘の通う小学校の運動会の代休日だったため娘同伴で講演会に参加でき受け入れていただきましたこと感謝しています。三重県からの参加ですが、とてもよかったです。若い人の受講が非常に少ないのは

残念、もっと関係団体など広く広報されたらと思います。

・～子どものまなざしから考えるワーク・ライフ・バランス～と言うサブタイトルにひかれて、このシンポジウムに参加させていただきました。自分自身のワーク・ライフ・バランスを考えさせられる内容でした。これからは子どもと過ごせられるよう仕事時間を減らしたいと思いました。良い機会、シンポジウムの時間を過ごすことができました。

・今日のようなお話を、今現在子育て中の当事者に向けてもっと発信して欲しいと思う。

・第３部の講演に対して、幼・保に従事している職員は危機感を持っていないのか疑問に思う。今回の表題をもとに更に掘り下げてほしい。

・老人福祉に携わっていますが、共通する問題が多いことに気づきました。いろいろありますが、株式会社の参入は余程の精査がなされないと事故が増えるリスクが格段に上がります。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

ワーク・ライフ・バランスを保障するためには、地方自治体の幼児教育に対する取組みに負うところが多い。

７．今後の課題

・「教育の原点は幼児教育にあり」とふまえ、女性教育、啓発に取り組んできた。

・来年度から施行される「子ども・子育て支援新制度」を子どもの側から見つめた、ワーク・ライフ・バランスと、子育て支援の在り方の一つとして、認定子ども園の展開のあり方を追究する。

・２５年度実施したシンポジウムから得た課題を中心に、２６年度は、

①政令市（静岡市・浜松市）における新制度に向けた進捗状況を把握する。

②子どものまなざしから考える　ワーク・ライフ・バランスのテーマを継続し、２６年度は、子どものまなざしから考えるところに重点を置き、ワーク・ライフ・バランスのロールモデルを考える。

・静岡県男女共同参画課と共催で「講演会」を開催する。

８月25日（月）13：00～15：00

以　上

女性の活躍で未来を拓く～多様なキャリア形成による経済社会の活性化
（国際ゾンタ２６地区等との共催）

１．開催趣旨・目的
世界の女性の地位向上を目指すシンポジウム

２．シンポジウム等の名称・テーマ
女性の活躍で未来を拓く～多様なキャリア形成による経済社会の活性化

３．日時・場所・参加者数
・平成 25 年 10 月 11 日（金）
・岡山コンベンションセンター
・400 名

４．プログラム
第１部　対談：国際的な女性の活躍とキャリア形成
マリア　ホセ　ランデイラ　オスターガード　氏（国際ゾンタ次期会長）
山崎　直子　氏　（宇宙飛行士）
第２部　パネルディスカッション
コーディネ―ター：三隅　佳子（国際ゾンタ２６地区アドボカシー委員長）
パネリスト：
住田　裕子　　（弁護士・元検事）
有馬　真喜子　（認定ＮＰＯ法人ＵＮ　Ｗｏｍｅｎ日本国内委員委員会理事長）
堂本　暁子　　（男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表）
石川　康晴　　（(株）クロスカンパニー代表取締役社長）

５．参加者からの主な意見
・第一部においては山崎直子氏のキャリアもお話を聞くことを期待していた。
・第２部に参加してとても有意義なお話が聞けたと好評でございました。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題
大都市圏においては様々なシンポジウムが開催され、情報を得ることも多いが、地方都市での開催はとても皆様に興味を持たれたことで盛会となりました。

７．今後の課題
今後はもう少し踏み込んだ内容のシンポジウムが望まれているように感じます。傾向はほぼ同じような内容のシンポジウムが多く、その先の具体的な行動にどのように移していくべきか

の指標が必要に感じられます。

今までの状況は多くの皆様が把握されていることですし、もう一歩先へ行けるすべを構築できるような会を開催したいと思います。

以　上

女性活躍推進を考えるシンポジウム in 福岡
「女性の活躍で変わる、変える、これからの中小企業」
（中小企業家同友会全国協議会女性部連絡会代表等との共催）

１．開催趣旨・目的

日本の経済成長に「女性の活躍」が欠かせないとの認識が高まっている昨今、女性活躍推進室やダイバーシティ推進室を設置し、本格的に女性の活躍推進に取り組む企業も増えてきました。また、福岡では、産官学民をあげて女性の活躍を推進しようと、「女性の大活躍推進福岡県会議」が発足。企業には女性の管理職率の目標を登録してもらう運動が始まろうとしています。

大企業の女性活躍の事例はメディア等でよく見聞きしますし、先の「女性の大活躍推進福岡県会議」の発足式でも出てくるのは大企業ばかりでした。中小企業経営者の意識はまだまだです。しかし、大企業のように充実した制度を整備できなくても、小さな企業だからこそ、トップの意識次第で社内環境を大きく変えることができます。中小企業では「制度があるというより、本人の希望に合わせる」ことができます。数はまだ少ないですが、10 人以下の従業員の企業でも育児休業を取得する社員のいる企業や、女性営業を増やして業績をあげている中小企業もあります。

一方、「女性活躍をすすめる」ことには賛成でも、「わが社でどうしたらいいかわからない」「うちのような小さな会社で女性の活躍促進など無理だ」と女性社員の登用に消極的な企業が多いのも事実です。女性の活躍で企業変革をもたらし、新しい時代に打ってでるためにも、今回は、中小企業経営者を対象に、女性社員を男性と同様にその可能性を信じ、仕事を任せてみよう、という気持ちになっていただくことを目的としています。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

女性活躍推進を考えるシンポジウム in 福岡「女性の活躍で変わる、変える、これからの中小企業」

３．日時・場所・参加者数

・平成 26 年 10 月 28 日（月）13：00-16：30
・電気ビルみらいホール
・115 名

４．プログラム

開会挨拶　中山英敬（福岡県中小企業家同友会　代表理事、㈱ヒューマンライフ　代表取締役）
第１部　基調講演
「人財を活かす　～女性の活躍で業績を伸ばし、経済の活性化を！～」
橘・フクシマ・咲江氏　／G&S Global Advisors Ink.　代表取締役
第２部　事例報告
「自社の女性活躍推進の取り組みについて」
・前田　雅史氏　／エイエス九州(有)　代表取締役

・稲田　磯美氏　／(株)ふくや　営業部お客様サービス室室長
・中村　太郎氏　／グリーンライフ産業(株)　代表取締役

第３部　グループディスカッション（討論と発表）

テーマ：「女性の活躍で変わる、変える、これからの中小企業　私たちの会社の未来は？」

本日のまとめ　合力　知工氏／福岡大学商学部　教授

閉会挨拶　糸数　久美子／中小企業家同友会全国協議会 女性部連絡会 代表、株式会社 ITAC 代表取締役

５．参加者からの主な意見

・国際的な視点で話を聴けました。また、女性だけというより会社・社会・男性すべてにおいて協力が大事だと思いました。
・数値目標をたて適正な人選をし育てていく、そして成果につなげていく。男女を区別しているのは実は私自身でありここから私の意識改革から始めていかなければならないと思いました。
・女性の自立、そして男性も家事の自立の大切さがよくわかりました。女性も男性も一人の人間として仕事も家事も育児も分担してやってく時代になるといいなと思います。
・企業＋行政、このようなスタイルのグループワークはとても意味のあるものでした。企業側の思いや考えがわかりました。
・適所適財で男女が楽しく働き成果を享受できる会社づくりに一歩一歩取り組みたいと思った。働き方を変えていきたい。変えていく気持ちを社員に伝えていきたい。
・企業が男女共同参画をテーマにグループワークを行政、内閣府等と行うことはとっても意味深いと思います。
・「女性が活躍できる社会づくり」の仕組みは、もうできている。それを本当にやるかは当事者の覚悟にかかっている。その覚悟が不十分であると思う。
・各社の取組が聞けて良かった。もっと詳しく知りたいと思った。トップの考えをどう伝え実践するかだと思う。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

日本経済において、女性が活躍し、成長していくためには、「企業の意識」、「家庭の意識」、「行政の支援」が大事であることを確認できました。すでに女性が活躍できる仕組みづくりはもう出来ており、あとは行政、経営者、社員と家族、そして社会全体が本当にやる覚悟があるかどうかにかかっています。今回のシンポジウムを通して、あらためて女性・男性に関わらず、その能力を認め、活躍させていくことが大事であり、企業の生産性があがるだけではなく、そこに働く人々の幸せにもつながることを再認識できる会合となりました。また、発表を聞くだけではなく、グループに分かれて討論することで、女性活躍について自分事のように考える時間を持つことができることも有意義な時間となりました。

７．今後の課題

2020 年 30%を目指すにあたり、企業としての問題、男性側の問題、女性側の問題、いろいろあり、道のりはまだまだだと考えられます。まずは女性がいきいきと働きがいを持って働ける職場づくりを目指しことが必要であり、これは企業だけで出来る話ではない。行政と中小企

業者、地域に暮らす人々が共に目指してやっていくことが重要であり、どう取り組んでいくかが今後の課題です。女性の活躍は経営者が変わってやるんだという決断、そして女性が持っている本来の力を発揮しあうことがこれからの世の中づくりになっていくと考えられます。

以　上

再チャレンジを目指す女性のための『学びなおし教育』
（婦人国際平和自由連盟日本支部等との共催）

１．開催趣旨・目的

個人のライフコースにおける仕事と生活の調和（WLB、ワーク・ライフ・バランス）がとれて初めて人間らしさの維持が可能となる。特に女性の場合、出産・育児を担うライフコースを考える上で、WLB 促進の重要性は 1985 年の男女雇用機会均等法の実施以降、改めて認識されて来た。しかし、産休や育児休業の制度が広く周知されている現在もなお、いったん離職せざるを得ない女性も多いのが現状である。本企画では、離職した大卒女性が再就職を希望するとき、それを阻む重大な障壁のひとつが能力の後退にあると捉えて、その対策としての「学びなおし教育」が広く周知されることを目的とする。

本企画を通じて期待される成果として、①離職した女性が再就職を計画するためのプログラムを組む手懸かりが得られる。②「学びなおし教育」が一般に広く周知される。③離職した女性が自信を持って再就職に挑戦することが可能になる。④再就職を果たした女性が、職場の男性上司や同僚とともに働きやすい職場環境を作出するための一助となる。⑤これらの成果は、WLB の実現を支援し、再就職挑戦者の数を増やす。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

再チャレンジを目指す女性のための『学びなおし教育』

３．日時・場所・参加者数

・平成 25 年 12 月 6 日（金）
・文京シビックセンター26 階スカイホール（東京都文京区春日 1-16-21）
・100 名

４．プログラム

13:01～13:04 開会挨拶
金子　堯子（婦人国際平和自由連盟日本支部会長）
13:04～14:00 基調講演
大沢　真知子氏（日本女子大学人間社会学部教授）
「ワーク・ライフ・バランス（WLB）における女性の再就職に果たす『学びなおし教育』の役割」
14:00～14:15 質疑応答①
14:15～14:25 休憩
14:25～15:20 パネル ディスカッション
「女性の再チャレンジの意欲を促す『学びなおし教育』の周知と拡充」
【パネリスト】

大沢　真知子氏（日本女子大学 人間社会学部教授）
鈴木　秀洋氏（文京区男女協働子育て支援部男女協働・子ども家庭支援センター担当課長）
中島　隆氏　（株式会社ネオテクノロジー 代表取締役社長）
三宅　真弓氏（チャートジャパン株式会社 日本女子大学リカレント教育課程修了者）
【コーディネーター】
紙谷　雅子氏（学習院大学法学部教授）

15:20～15:30 質疑応答②
15:30～15:50 パネル ディスカッション
15:50～15:55 まとめ
紙谷 雅子氏（学習院大学法学部教授）
15:55～15:58 閉会挨拶
田中　由子氏（日本女性法律家協会会長）

５．参加者からの主な意見

1)シンポジウムに対する評価欄では、1 部 基調講演および、2 部 パネルディスカッションについてのアンケートにおいては、「とても良かった」１部および 2 部ともに、52%、「良かった」１部 37.5%、2 部 22.9%、「どちらともいえない」１部 2.1%、2 部 6.3%、「物足りなかった」1 部 2.1%、2 部 0.0%、であった。

2)シンポジウムのテーマである女性の再就職についてのアンケートにおいては、①「再就職を阻むものがあるとすれば、その理由は何ですか。」に対する回答は、育児 10.4%、介護 6.3%、能力の後退 27.１%, 希望する仕事がみつからない 20.8%、であった。

3)②(再就職を希望する方は、)「再就職のための学びなおし教育を受けてみようと思いますか。」に対する回答は、思う 41.7%、思わない 2.1%、その他 10.4% 、無回答 45.8%、であった。

4) ③「本日の企画から、今後の生活へのヒントが得られましたか。」に対する回答は、得られた 72.9%、 得られない 0%、 無回答 25%、であった。

5) 自由記述

１．予約なしで入ったのですが(保育も含め)子供のことが少し心配だったのですが、関係の方（保育担当）から子供の様子をおしえていただいて嬉しかったです。ありがとうございました。

２．アサーティブの手法を使い人権、自尊感情、エンパワーメント、自分らしさ等伝えているが、意識が大切である事を再認識できた。秋田リカレント教育ができるように(思いを形)に行動したい。行動するパワーをいただいた。

３.いろいろな働き方をすることに関して経営者の立場からの意見もお聞きして貴重な時間となりました。残業するから重宝する会社の利益に結び付くわけではない。限られた時間にいかに効率良く仕事をするかが重要であるという考え方はもっともだと思いましたが、能力の高い方には良くて、ルーティーンな仕事しかできない人には大変だと正直思いました。

4.国の政策としてのワークライフバランスと企業側の求める人材像のギャップを縮めること、

男性の考え方の転換が必要ではないかと思いました。

5. 役所が終了生をインターンとして是非受け入れていただきたいです。高齢女性の学び直しの問題も今後の取り組みの考慮に入れて欲しいとおもいます。参加者にもシニアの女性の姿が少なからずみられました。今後もこうしたテーマをとりあげて下さい。とてもいい企画です。
6. 私は自分の人生の大部分を終え、ボランティア活動や社会貢献の階段に入っていますが、子供達・若者世代の生き方の参考になった。「学び直し教育」を若い世代に大いに進めたいと思いと同時に何歳になっても学ぶことは続けるべきだと感じた。
7. 現在仕事しているので男性側の意識改革が必要と考えています。
8. 私の職場は女性比率を高めるためにパートタイムが調整になっているのが現状ですが、そこから飛び出せば様々な道があるのだと希望はもてました。男女の意識変革が重要だと思いました。
9. 今後のワークライフバランスは自分の働き方の見直し、会社と自分だけでなく社会貢献や家族などとのかかわりも含まれると考える事が大事と思いました。
10. やりたいこと！に挑戦していきます！中島さん、三宅さんの実際に基づいたお話しは有意義です。鈴木さんの行動の幅の広さが人間の幅に繋がっているように見受けます。是非文京区長と躍進してください。大沢先生の論理的なお話しも興味深く拝聴させていただきました。ありがとうございます。
11. 参加者が積極的にフロアーから意見を述べているのが良かった。
12. リカレント教育のカリキュラムがとても気になっております。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

１．満席となる盛況で東京近県のみならず、長崎、広島、香川、兵庫および秋田の各県からも参加された。また、資格も地方自治体、企業、NPO、個人と多岐にわたり、年齢も30代～70代にわたる広範囲で、特に30-40代の女性が44%弱を占めていたのが特徴である。

２．また、支援を目指す男性も多く参加された。基調講演を通じて、ワークライフバランスとは、会社と自分だけでなく社会貢献や家族などとのかかわりも含まれるという考え方が、参加者に改めて捉えなおされた点に成果が得られた。

３．パネル ディスカッションでは、パネリストは、①学びなおし教育を修了して再就職を果たしている女性 ②学びなおし教育を修了して再就職を果たしている女性を多数雇用している会社の経営者（男性）、③区役所において地域行政の携わる役職者（男性）、③基調講演者（女性研究者）、から構成された。その結果、参加者にとって、WLBや、「学びなおし教育」への具体的なイメージを得る機会となったと考えられる。フロアーからの質問に、「学びなおし教育」を受ける資金の調達について出されたが、パネリストからの答えに、多くの参加者の共鳴が認められた。パネル ディスカッションの結果、アンケートの中に、②（再就職を希望する方は、）「再就職のための学びなおし教育を受けてみようと思いますか。」に対する回答として、思う 41.7%　が得られたと考えられる。

４．　高齢者の参加者から、若者世代の生き方を知る機会となったという声もあって、女性の再就職は、シニア世代によるバックアップも大切である点から、広く周知していく上で、心強

いことであった。

７．今後の課題

１．このシンポジウムは、男性が、「女性が再就職することは、良いことなのだ。」という意識を持つ重要さを確認することとなった。男性への啓蒙活動のあり方を考え直す必要がある。

２．現在、女性の再就職は企業内で取組が始められているが、あくまでも、現在勤務している社員への取組である。再雇用の問題を、女性全体の問題として捉えて行く方向性が求められる。

３．「学びなおし教育」課程を備えている大学は、現在、都内で1か所に過ぎない。少なくとも、地方の大きな都市に1つはそのような大学を設置してほしいという声がある。秋田県からの参加者の声にも現れている。

４．「学びなおし教育」課程の学生への奨学金の充実の面での緊急な対応が、必要である。

５．参加者からも、このようなシンポジウムが今後も開かれることへの希望があったように、再就職希望の女性を支援するための、「学びなおし教育」の周知を徹底してほしい。

以　上

女性はもっと活躍できる！～WEPs が変える仕事の未来～
（特定 NPO 法人国連ウィメン日本協会等との共催）

１．開催趣旨・目的

平成 24 年度の連携会議との共催事業である「女性の活躍推進シンポジウム～女性はもっと活躍できる」（平成 25 年 2 月 15 日）の開催から得られた知見と経験を踏まえ、以下の諸点を目的としてシンポジウムを実施した。

（１）具体例や成功事例の共有を通じた、WEPs に関するさらなる理解の浸透

（２）新しい企業のあり方や働き方への展望をともに考える場の提供

（３）特に学生や若い人たちに対し、女性が十分に能力を発揮し活躍できる労働環境や企業のあり方についての世界の潮流と展望について啓発する機会の提供

２．シンポジウム等の名称・テーマ

女性はもっと活躍できる！～WEPs が変える仕事の未来～

３．日時・場所・参加者数

・平成 25 年 12 月 16 日（月）13:00～16:00

・女性就業支援センターホール（東京都港区）

・192 名

４．プログラム

第 1 部　基調講演「男性リーダーと共にジェンダー平等を」

エリザベス・ブロデリック氏／オーストラリア連邦政府　性差別担当コミッショナー

第 2 部　パネルディスカッション「企業と仕事の未来～WEPs が日本企業を変える！」

パネリスト：

石川　康晴氏　／（株）クロスカンパニー代表取締役社長

國井　秀子氏　／芝浦工業大学学長補佐・大学院工学マネジメント研究科教授、元リコーIT ソリューションズ（株）会長執行役員

横田　響子氏　／（株）コラボラボ代表取締役

コーディネーター：

岩田　喜美枝氏　／国連 WEPs リーダーズグループメンバー、2011・12 年度経済同友会人財育成・活用委員会副委員長、国連ウィメン日本協会副理事長

・ジェンダー平等の実現が多面的かつ複雑な課題であり、あらゆるセクター、なかでもビジネスセクターとの協力が不可欠であることを強く意識し、「変革のための男性オピニオンリーダー（Male Champions of Change)」に代表される取り組みの指針として WEPs を活用してこられたオーストラリア連邦政府性差別担当コミッショナーであるエリザベス・ブロデリック氏による基調講演と、日本において WEPs を活用しながら企業における女性の活躍に取り組んでおられ

る方々によるパネルディスカッションをおこなった。
・内閣府、男女共同参画推進連携会議、公益社団法人経済同友会との共催により実施し、オーストラリア大使館、ILO 駐日事務所、東京商工会議所、一般社団法人グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワークから後援をいただいた。

５．参加者からの主な意見

【基調講演】
・非常に触発され刺激を受けた。
・パワーをもった男性と一緒に取り組むことの重要性を感じた。
・男性に対し、組織的なアプローチだけでなく、一人一人の心に訴えていくことの大切さがわかった。
・心に訴えることの必要性と、その具体的事例がとても役に立った。
・DV をビジネスと結びつけて話されたのが興味深かった。
・男女差別について、頭で理解するだけでなく心で理解するという言葉に改めて納得するところがあった。

【パネルディスカッション】
・非常に参考になる具体的な方法をいくつも知ることができた。
・WEPs の具体的な事例や解釈があり、WEPs の理解が深まった。
・WEPs について色々な側面から話が聞けて、これを広めていかなければならないと思った。
・大学で女子学生へのキャリア支援に携わっているが、とても貴重な内容だった。今日の話を参考に支援していきたい。
・進んでいる企業の考え方を知ることができて、かなりの収獲だと思っている。改めて当社における女性管理職比率の目標設定、情報開示の重要性・必要性を認識した。
・企業のトップの具体的な行動や姿勢は大変参考になり、励ましになった。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

・シンポジウムについての評価については、「とても良かった」が 51.7%、「良かった」が 43,8%で、合計すると 95.5%になり非常に高い評価をいただけたことを喜んでいる。
・シンポジウムに参加する前に WEPs について知っていたかどうかについては、「名前だけは知っていた」と「まったく知らなかった」が 55.0%であり、本シンポジウムを通じて、WEPs の周知に貢献できたと考えている。
・「社会人になる前に女性の活躍の実状を知る事ができた」「業界、立場の違うリーダーが同じ目標に向かって社会を動かしている事を実感し、自分も何かできる事を着実に実行していきたいと思った」等の評価をいただけたことを非常に嬉しく感じている。

７．今後の課題

・学生や若い人たちへの啓発を目的の一つに掲げたが、アンケートに答えてくれた参加者を年齢層別にみると、20 歳代が 18.0%、30 歳代が 16.9%であり、後一歩の努力が必要だったかと感じている。(最も多かった年齢層は 40 歳代の 24.7%)

・女性の活躍推進に関し、今後、どんな情報が必要かを尋ねたアンケート結果からは以下のような答えが得られた。WEPsを通じたジェンダー平等の推進のための今後の課題と考えたい。「女性が働きつづける際の課題である『家庭』の問題をどのように解決・克服したのか」「子どもを産むことによって被る不利益がなくなるよう支援する制度の整備」「女性だけでなく人類100年後のことを考えたWEPs」「男性の意識改革の方法。男性管理職への教育」「多様性が企業に具体的に何をもたらすか」

以　上

女子中高生の医理系進路選択支援～医理系の研究って、すっごくおもしろい！～
（公立大学法人奈良県立医科大学等との共催）

1. 開催趣旨・目的

第３次男女共同参画基本計画では、「理工系分野の人材育成の観点から、女子学生・生徒の興味・関心の喚起・向上にも資する取組を推進するなど女子学生・生徒のこの分野への進路選択を支援する。」とされており、第４期科学技術基本計画でも女性研究者の採用に関する数値について「医学・歯学・薬学系合わせて 30%の達成を目指す。」との目標が掲げられています。

しかし、本学を例に取ると医学部医学科での女子学生の比率が約 30%であるのに対して、大学院修了後も研究を継続していく者の比率は半減するなど、医学部進学も研究者への道のひとつであることをイメージできていない女子中高生が多い。

そこで、女性研究者による基調講演やパネルディスカッションおよびサイエンスカフェを通して、医学系・生命科学系の研究に触れることにより、将来の進路を選択する中学あるいは高校時代に、i）医学部卒業後に大学院へ進学すること、ii）臨床医を続けながら研究にも取り組んでいくこと、iii）基礎医学・生命科学の研究を続けることを認識し、女子中高生が医師となった後、医学系・生命科学系の研究者として生きる道も選択肢の一つであることをイメージできるようになることを目的として開催しました。

2. シンポジウム等の名称・テーマ

女子中高生の医理系進路選択支援～医理系の研究って、すっごくおもしろい！～

3. 日時・場所・参加者数

・平成 26 年 1 月 11 日（土）10：00～16：00
・奈良県文化会館（奈良県奈良市登大路町 6-2）
・58 名

4. プログラム

開会挨拶：公立大学法人　奈良県立医科大学　理事長　吉岡章
第１部　講演「私の進んできた道、そしてこれから」
　　大林　千穂（奈良県立医科大学　病理診断学講座　教授）
　　森本　恵子（奈良女子大学研究院　生活環境科学系　教授）
第２部　パネルディスカッション「女性が医理系分野で研究するには」
　　（パネリスト）
　　根津　智子（奈良県郡山保健所長）
　　水野　文子（奈良県立医科大学　細菌学教室　講師）
　　須﨑　康恵（奈良県立医科大学　第二内科学教室　学内講師）
　　植栗　千陽（奈良県立医科大学　産婦人科学教室　助教）

（コーディネーター）
吉田　昭三（奈良県立医科大学　産婦人科学教室　助教）
第３部　サイエンスカフェ
（コーディネーター）
御輿　久美子（奈良県立医科大学　女性研究者支援センター　特任教授）
須﨑　康恵（奈良県立医科大学　第二内科学教室　学内講師）
吉田　昭三（奈良県立医科大学　産婦人科学教室　助教）
（リーダー）
王寺　典子（奈良県立医科大学　細菌学教室　助教）
岡本　希（奈良県立医科大学　地域健康医学教室　講師）
辰巳　晃子（奈良県立医科大学　第二解剖学教室　准教授）
豊田　ふみよ（奈良県立医科大学　第一生理学教室　講師）
松吉　ひろ子（奈良県立医科大学　第二生理学教室　助教）
山内　晶世（奈良県立医科大学　生化学教室　助教）

5. 本年度、参加者からの主な意見

・一口に医理系と言っても、たくさんの道があるんだということを知った。自分にもいろいろな可能性があると信じて、これから進路を決めるのに役立てようと思う。（中学生女子）
・女性の医理系での活躍について今までに知ることができなかった情報などが得られ　大変参考になりました。（高校生女子）
・医理系を目指す学生や保護者にとってモデルとなるような講演であり希望が生まれるもので良かった。また、一つの道をまっすぐ進むことだけでなく寄り道してゆくことも無駄ではないというメッセージが若い人に伝わるお話でした。（40 代女性）
・研究の面白さが分かった。（中学生女子）
・中高生がどうして勉強するのか、そして大学に行く理由とは何なのか分かった気がします。（高校生女子）
・私の興味のある小児科の先生や、おなじ高校から県立医大に入学してがんばられている先生がいて、医師や研究者を身近に感じられました。（高校生女子）
・女性が社会に役立ち、人のために働くという大切なメッセージをこれからの若い方々に伝えることができた、とても良いディスカッションであったと思います。（40 代女性）

6. シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

・医理系分野で活躍をする女性研究者の講演や研究内容の紹介を通じて、普段接することの少ない医理系女性研究者の存在や活動を周知した。
・女性研究者の学生時代の思い出やキャリア形成上の苦労話等、今までの人生を振り返る内容の講演から、女性研究者をより身近な存在と捉え、研究をすることが特別なことではないと感じ、女子中高生の進路としても選択し得ると感じてもらえた。
・医理系の中にも多様な進路があり、女性研究者も多様な人生やキャリアを歩んでいることを

周知し、女子中高生の進路選択の参考となった。

・女性が生涯を通じて学び働くことの素晴らしさを伝えることで、女子中高生の勉強へのモチベーションを高めた。

7. 今後の課題

・参加者を増加させるための広報の工夫が必要である。

・医理系研究の一端を体験できるような演示実験を希望する意見があったので、今後は、よりわかりやすく研究のおもしろさを伝える「実験教室」の開催を目指す

以　上

企業×女性起業家×学生の出会いの場の創出
－WEPs（女性のエンパワーメント原則）の実現に向けて－
（国立大学法人お茶の水女子大学等との共催）

１．開催趣旨・目的

国連のUNWOMENとグローバルコンパクトが作成したWEPｓ（女性のエンパワーメント原則）の第五・第六原則の促進を図るイベント。７原則で構成されるWEPs、署名企業は各原則の遂行に尽くしているが、「ステークホルダーや地域との参画」を謳った第５原則、第６原則は、各社内で実施される管理職の登用促進や教育・研修機会の提供などの取組とは異なり、その活動方法や取組の在り方が模索されている。日本におけるWEPsの展開を考える際、第５、第６原則の活動方法を検討することは極めて重要であり、それは、WEPsの特徴が「職場だけでなく市場、地域とともに取り組む」ということにあること、さらには、男女共同参画社会の創造と深く関係している。

こうした現状に鑑み、本事業では、第５原則のうち「女性の経営者や起業家との取引の発展、取引先や同業者の関与」、第６原則のうち「ステークホルダーや当局、その他の機関との協働促進」にフォーカスし、お茶の水女子大学、一般社団法人神奈川ニュービジネス協議会、J300実行委員会（(株）コラボラボ、ジャパンポートLLP)、日本ニュービジネス協議会連合会等が協力し、女性起業家と学生、中小企業、WEPs署名企業による女性のエンパワーメント促進事業を実施する。

また、本事業は以下の目的と成果が期待される。

①WEPs署名企業や女性のエンパワーメントに関心がある一般の方々と女性起業家との間に接点を生み出すことで、男女共同参画社会の創造と理解を深める機会となる。

②女子学生にとって、女性起業家たちはロールモデルのひとつになる。また、女性起業家の業務を紹介するプレゼンテーションを通じてWEPsや女性起業家の業務に深い理解が得られる。

③女性起業家の業務内容を広く社会に発信し、取引機会を創出する。

WEPs第５、６原則への取組の好事例を発信する。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

企業×女性起業家×学生の出会いの場の創出- WEPs（女性のエンパワーメント原則）の実現に向けて-

３．日時・場所・参加者数

・平成26年1月22日（水）13:00～16:00
・渋谷ヒカリエ 8/COURT（東京都渋谷区渋谷2-21-1）
・300名

４．プログラム

■女性起業家の取組紹介10社によるブース展示

女性起業家とともに女子学生がプレゼンテーション。参加学生はイベント前3か月、お茶の

水女子大学における WEPs 理解の授業と女性起業家のもとで事前にインターンを体験。

■トークセッション

「女性起業家と取引企業のトーク」先進事例の共有

■プレゼンテーション

９社の大企業からいただいた事前課題に対し女性起業家 41 社がプレゼン

■ワークショップ

「女性起業家と取引候補企業でマッチングアイデアをディスカッション」

■クロージングセッション

企業からのオファー発表

５．参加者からの主な意見

＜参加した大企業＞

本イベントを機に、女性起業家を知ることができた／女性起業家たちのアイデア出しの早さと熱意に驚いた／日頃検討している課題に対し、異なる角度からの提案がなされ是非検討をしたい。

＜女性起業家＞

通常プレゼンテーションする機会が少ない企業に出会うチャンスとなった／学生たちのサポートがしっかりしており非常に新鮮だった／今回のイベントを機に大企業との取引の道があることを意識することができた

＜学生＞

女性起業家のもとでのインターンは貴重な経験､女性起業家の実情を垣間見ることができた。

＜全体＞

300 名を超える参加者で会場が一時混み合う結果に。会場の再検討や、プログラム時間においてはプレゼンの時間をもっと長めにしてほしいなど今後の改善点のご意見も多数いただいたく形となりました。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

■300名を超える来場者。女性起業家の取組を広く知ってもらうきっかけづくりとなった

■第五原則の促進に向けた具体的な成果につながった

→企業との商談成立が約６件、後日検討したいが12プラン（約30%）。

■企業、女性起業家双方に取引イメージをもってもうことができた。

・ワークショップには大企業ふくむ60社が参加。10分で150を超えるアイデアが生まれ女性起業家と大企業のコラボレーションについて考えるきっかけとなった。

・トークセッションでは、先進事例を共有

■女子学生に、女性起業家のもとでインターンを行うことでキャリアの選択肢を増やし、企業にプレゼンするスキルアップの機会になった。

・３か月前より、お茶の水女子大学などの学生が担当企業のもとでインターンを経験。事業の理解を重ね、ブースの展示方法やプレゼンPR方法について練ることでスキルアップにつながった。

・学生にとって起業家と接し、大企業に対してプレゼンテーションを行う貴重な機会となった。
・WEPs第６原則である「ステークホルダーや地域との参画」を企業と女性企業家のマッチングを行うことで推進することができた。

７．今後の課題

・参加者満足度のより向上をはかる：プレゼン時間が短いという声、人が混雑していて声が聞き取りづらいなどの声もあった。
・アンケートの回収：プログラムが多岐にわたり複雑だったため、アンケートの回収がしにくかった。後日ヒアリングで成果共有は行っているが、当日アンケートの回収率を高めたい。

以　上

シンポジウム「理系の仕事～いつか未来を創るあなたへ～」
（一般社団法人日本女性科学者の会等との共催）

１．開催趣旨・目的

科学研究者人材の活用については、総合科学技術会議が 5 月 17 日付取纏めた「科学技術イノベーション総合戦略（原案）」の中でも重点的に取り組む課題として数値目標を掲げ記載されている。東北地域被災地においては、未だ仮設校舎での勉学を余儀なくされている中高生達が多く、理系志望の中高生の将来への進路決定なども多大な影響が出ており、模索状態が続いている。そのような状況下生活基盤の復興に続く課題の一つとして、理系を担う次世代若手育成による裾野の拡大が地域に夢と希望を与え活性化へ貢献する重要課題であると考えられた。なぜなら、個々人の能力と個性を存分に生かせる選択肢を示せるからである。特に、人材活用の観点からも、近年急増する女子学生の理系進路選択を後押しする取り組みが、最も効果的であると考えられた。

具体的に理系女子育成に向けた環境整備を行うためには、研究者と直接話す機会が無い中等教育の段階から、メンターシステム導入による世代間のつながりを構築することが有効である。特に理系女子の進路選択に当たっては、低学年ほど家庭環境における保護者の意向が大きく反映される。そこで学生本人だけではなく、進路選択に多大な影響力のある保護者や教員を対象に理系選択を容易にするための環境を整えると共に、働く女性研究者がより豊かで楽しい人生を歩むための社会環境を作り上げていくことを目的に、意識改革を促すような啓発的なワークショップを企画した。

本会は 50 年以上にわたり「女性科学者の友好を深め、各研究分野の知識の交換を図る」目的で活動を続けてきた。そこで本会の持つ豊富な人的ネットワークを活用し、昨年秋、女性科学者が自他ともに価値あるキャリアであることを次世代に伝える趣旨のもと「サイエンスネットワークを広げよう」を開催した。研究者と中高生、大学学部生、大学院生を交えた双方向のディスカッションが大変好評であり、参加者と主催側双方に大きな達成感を与えることが出来た。

今回の企画は東北被災地域における現在までのネットワークを中心に現地協力校を募り、メンターにふさわしい女性研究者等に登壇いただく講演会（第１部）につづいて、地元の中高生、理系大学生、大学院生、保護者、進路指導教員等が複数のテーブルに分かれて、講演者と双方向のディスカッションや質疑応答をいただいた（第２部）。理系進路選択から研究者に至る様々な段階の人たち、日頃は接点のない科学者と中高生、大学生、大学院生が一堂に会することで、相互にインパクトある対話が出来、なおかつ新たなネットワークを構築する契機になったと思われる。結果として，将来、自らが望む理系分野への進学、仕事への従事をスムースに選択出来、管理職やリーダーとして質の高い人材となることは、社会的な人材活用の観点からも大いに期待されるものである。若手人材育成は、日本女性科学者の会としてのメインの活動趣旨に沿うものであり、新たな、そして良質なネットワークを構築できることが期待されるので、会を挙げて取り組んだ。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

シンポジウム「理系の仕事～いつか未来を創るあなたへ～」

３．日時・場所・参加者数

・平成 26 年 2 月 2 日（日）12：00～16：30

・コラッセふくしま　多目的ホール

・210 名

４．プログラム

時間	所要時間	内容
11:30－12:00	30 分	開場／受付開始
12:00		開会
12:00－12:05	5 分	＜開会挨拶＞ 大倉　多美子氏（日本女性科学者の会会長）
12:05－12:20	15 分	＜講演①＞ 日野 珠美氏（NHK 報道局報道番組センター チーフプロデューサー） 「文系 → 科学番組開発中のプロデューサー」
12:20－12:35	15 分	＜講演②＞ 小杉 尚子氏（NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任） 「音楽で健康になる」
12:35－12:55	20 分	＜講演③＞ 阿部 啓子氏（東京大学農学部 名誉教授） 「大学教授になる」
12:55－13:00	5 分	休憩
13:00－13:20	20 分	＜講演④＞ 外山 玲子氏（米国国立衛生研究所 Health Scientist Administrator） 「サイエンスは世界に羽ばたくパスポート」
13:20－13:40	20 分	＜講演⑤＞ 武田 裕子氏（ハーバード大学医学校総合診療部門 フェロー） 「世界で日本を学び地域に活かす」
13:40－13:45	5 分	休憩
13:45－14:05	20 分	＜講演⑥＞ 勝山 雅子氏(株式会社資生堂新領域研究センター食品応用研究 G 副主任研究員) 「企業で美しさを応援する」
14:05－14:25	20 分	＜講演⑦＞ 高橋 真理子氏（朝日新聞編集委員） 「理系 → 新聞記者」
14:25－14:40	15 分	休憩・舞台設営
14:40－15:15	35 分	グループディスカッション　セッション 1
15:15－15:50	35 分	グループディスカッション　セッション 2
15:50－16:20	30 分	グループディスカッション　セッション 3
16:20－16:30	10 分	＜閉会挨拶＞河上　隆氏（内閣府男女共同参画局）

団体の紹介

SJWS（日本女性科学者の会）

日本女性科学者の会は「女性科学者の友好を深め、各研究分野の知識の交換を図り、女性科学者の地位向上をめざすとともに、学術および科学技術の振興に寄与すること並びに世界の平和に貢献すること」を目的として1958年4月に「婦人科学者の会」の名称で設立されました。この設立にあたり、当時女性国際民主連合副会長の平塚らいてう女史、ノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士をはじめとする世界平和アピール七人委員会から多大なご支援をいただきました。以降、半世紀にわたり、第一線で活躍する会員および非会員による公開講演会、女性科学者・研究者の地位問題に関する公開シンポジウム、理科実験教室の開催など幅広く活動してきました。1999年6月に名称を「日本女性科学者の会」と改め、1999年には第11回国際女性技術者科学者会議を主催しました。2004年には日本学術会議の協力学術研究団体となり、19期では理学振興研究連絡委員会委員および科学教育研究連絡委員会オブザーバーとして活動し、前者で起草された「科学技術を文化としてみる気風を醸成するために」の第4部（分野）対外報告書として10項目の提言を付して刊行されました。20期では本会から5名（2部：生命科学、3部：理学・工学）、内2名は本会の奨励賞受賞者）の会員が選出され、日本学術会議会員として参加、活躍中です。

特に最近では2002年10月から男女共同参画学協会連絡会に加盟し、科学技術の分野において、女性と男性が共の個性と能力を発揮できる環境づくり・ネットワークづくりと社会貢献を目指して活動しています。その一環として恒例となりました国立女性教育会館の「女子中・高生夏の学校」にも毎年共催参加しています。また本会は女性研究者・技術者を援助、支援するために1995年より奨励賞・功労賞を設けています。会員は自然科学系研究者、技術者の全分野をカバーしている団体です。

ふくしまサイエンスぷらっとフォーム(spff)

ふくしまサイエンスぷらっとフォーム(spff)は、平成20年度に独立行政法人科学技術振興機構(JST)の地域科学技術理解増進活動推進事業に採択され、福島大学が事務局を務める活動です。連携機関である福島県とともに「地域の自然と文化と科学にふれて学ぶ」をキーワードに、県内の公設試験施設や社会教育施設(科学館・プラネタリウム・美術館・図書館等)、企業等と連携して、学際的・文理融合的な科学コミュニケーション活動を実施してきました。支援終了後は学校(SSH指定校、科学部)等も巻き込んで、福島県の特徴でもある多様で豊かな自然・文化・産業等を取り込む「ふくしま型」の科学コミュニケーション活動を行なっています。東日本大震災直後は、spffのネットワークを活用して避難所支援活動を展開し、最近では放射能汚染による除染活動や各種放射能モニタリング調査に携わる会員の協力を得て、原発事故被災地の視点での「放射線理解のための普及活動」にも取り組んでいます。

理系の仕事

～いつか未来を創るあなたへ

国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業

日時 平成26年 2月2日(日) 12:00～16:30

会場 コラッセふくしま 4階「多目的ホール」

「理系の仕事のホントのトコロ」「理系女子のホンネ」等々…第一線で活躍している女性からしか聞けない話がてんこ盛りの1日。理系に進もうかどうしようか迷っている中・高・大学生のあなたっ！これからの人生が変わる1日になるかも…！ 一緒に未来へ羽ばたこう！

内閣府　SJWS　spff　ふくしまサイエンスぷらっとフォーム　MBSJ

主催／内閣府、男女共同参画推進連携会議、日本女性科学者の会（SJWS）
共催／ふくしまサイエンスぷらっとフォーム（spff）
後援／福島県教育委員会、福島県科学コミュニケーションリーダー、東北化学教育研究会、特定非営利活動法人日本分子生物学会
オーガナイザー／日本女性科学者の会理事（福島県立医科大学）本間美和子

プログラム

◎司会進行：本間 美和子
（日本女性科学者の会理事、福島県立医科大学医学部准教授）

12:00 開会

12:00～12:05 挨拶（日本女性科学者の会会長 大倉 多美子）

12:05～14:25 第1部「理系の楽しさ、仕事の喜び」

14:25～14:40 休　憩

14:40～16:20 第2部「グループディスカッション」

※講師が移動して3セッション行います。小グループに分かれて、各講師とじっくりディスカッションしましょう！

16:20 閉会挨拶

グループディスカッション 進行役（50音順）

- 荒谷 美智（青森県六ケ所村文化協会）
- 安齋 みどり（日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 ファーマシューティカルシステム事業部）
- 石川 稚佳子（東邦大学 薬学部）
- 大倉 多美子（慶應義塾大学 医学部）
- 加藤 美和（日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 ダイアグノスティックシステム事業部）
- 金子 律子（東洋大学 生命科学部）
- 小浪 悠紀子（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）
- 近藤 科江（東京工業大学 生命理工学部）
- 中山 榮子（昭和女子大学 生活科学部）
- 永澤 秀子（岐阜薬科大学 創薬化学大講座）
- 新田 明美（公益財団法人 医療科学研究所）
- パサビ・チャクラボルティ（岩手県立大学 ソフトウェア情報学部）
- 平野 浩子（岩手医科大学 医療専門学校）
- 藤森 千尋（日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 バイオサイエンス事業部）
- 山口 陽子（東海大学 工学部）

第一部 講師の紹介

「文系→科学番組開発中のプロデューサー」

早稲田大学文学部卒。地方都市育ちくらしや経済を中心としたニュースや番組制作を行う。2012年NHKスペシャル「食みたいのに食べない～好き嫌いの衝撃」協力。今はサイエンスを楽しく伝える番組開発中。「神の目のことは何でもサイエンスなんだ！」と言える日々。16歳、3児の母。

日野 珠美
NHK放送文化研究所 メディアテクノロジーセンター プロデューサー

「サイエンスは世界に羽ばたくパスポート」

皆さんは医学・生物学研究にどんなイメージをもっていますか？外国で勉強したり仕事してみたいと思ったことはありませんか？私は東京都小金井の近くにある1期の本校に出会ったことからこの道を進むことになりました。私は日本で大学院を卒業してからずっと海外で暮らしています。世界各国のたくさんの友人・研究者に会い、また自分の興味深い研究をする機会にも恵まれました。皆さんにも世界を舞台に輝く冒険に参加わってほしいと思います。

外山 玲子
米国国立衛生研究所 Health Scientist Administrator

「音楽で健康になる」

1995年聴覚医学大学院機工学研究科「聴覚科学専攻」修了。日本電信電話株式会社入社。2004年慶應義塾大学大学院にて博士（工学）取得。2005年ニューヨーク大学医学研究所、2013年より現職。専門は音響信号処理、データ・サイエンス等で、生体研究分野情報処理を入力して学習を検索する「パターン検索技術」開発は深化進・次世代研究開発を見越「プログラムの応用研究」として医療現場の研究を推進。リハビリ支援のための音響研究中。

小杉 尚子
NTTコミュニケーション科学基礎研究所 研究主任

「世界で日本を学び地域に活かす」

1986年筑波大学医学専門学群卒業。高校までは文学少女で理系はむしろ苦手。でも学生時代大会で仲間の友人が亡くなり、一念発起して医学部進学。研究室に楽しく通い詰めて大学院へ。その後、ハーバード大学に就職。帰国後は東京医科歯科大学、第二医学部等教授職の専門職員として勤務。地域コミュニティ（「保健」）の大きなつながりに触れ合えました。それを深めるために2010-13年に小学生の子供と共に福島へ。日本の優れた未来を共感しました。

武田 裕子
ハーバード大学 医学部遺伝疫学研究 フェロー

「企業で美しさを応援する」

薬学博士。薬剤師の資格を取ったけれど、結局研究を続けずに私が企業で研究を続けているのは、「臨床以外にも科学で人の役に立つ事ができる」から。「有のの見方ーつで新しい価値が生まれることが面白い」と感じているからです。今日は私の研究技量に触れながら、実際に応援する一企業の「製品が出来るまでのしくみと女性研究者の関わり方」などをご紹介します。

勝山 雅子
株式会社資生堂 研究開発センター 食品&開発研究 基礎研究所

「理系→新聞記者」

パルリーナの小説に憧れながらも自然の観察を知りたいという思いに駆られて東京大学理学部地理学科へ。1979年、たまたま合格した新聞社に入社。経済担当記者や科学部長、科学エディター（解説）などを務めました。約10年間、日常の観察から社会のさまざまな出会いにまで広がり、「しっくりけれど完璧な解答を決定しています。『村山さん、宇宙はどこまでわかったんですか？』（研究者）を合作上げました。

高橋 真理子
明治薬科大学 客員教授

「大学教授になる」

"私流の科学に魅せられて"一生のキャッチコピーです。三度グルメ志向で、おいしい料理をつくる三種類の人間がいるとした私にとって"研究"は格好の研究対象です。興奮するお気味の成長は食欲の"好・嫌・食・共・同味成分析"の受容体に使用して発芽し、逆に"ゴルゴ"は・保護を相乗させる生命誕生です。この科学は夢ある科学へと発展しています。"使られるデーター"とのはざまにて興奮な研究モチベーションになると思います。

阿部 啓子
東京大学教授 名誉教授

５．参加者からの主な意見

・各講演、７割ほどの参加者が「面白かった」という回答をしている。残り３割はほぼ「面白かったー普通」「普通」と回答しており、参加者にとって面白い内容であったと考えられる。

・ラウンドテーブルについても、７割ほどの参加者が「面白かった」と回答している。自由意見欄には、講演者との距離が近いことで様々な話ができたという事が多く書かれており、これが高い満足度につながったと考えられる。

・シンポジウム全体を通しての感想は、７割以上の参加者が「良かった」と回答している。自由意見欄では、様々な世界で実際に活躍している人の話が聞けた事に満足しているという回答が多く書かれていた。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

今回のメインの参加者である中高生にとっては、社会の第一線で働く人々と触れ合う機会はあまり多くないので、このようなイベントは貴重な機会であり、刺激的であったと考えられる。７割程度の参加者が、科学への興味が湧いてきたと回答している。本シンポジウムを通して参加者に、科学の幅広さ、新たな視点をもたらすことが出来たと考えられる。

７．今後の課題

内閣府は「民間・地域等と連携することにより、男女共同参画社会の実現に向けた諸課題とその解決方策について、国民各層における理解を促進することが重要』との方針で本事業を推進しているが、全国のSJWS会員各位もそれぞれの地域でより良い連携のためのネットワークを構築しながら、今後の活動を効率よく工夫していく時期に来ていると感じた。様々なツールを駆使しつつ、心意気のあるSJWSの活動を、力を合わせて進めていきたいと考えている。

以　上

女性技術者のエンパワーメント推進に関するシンポジウム
「女性技術者登用による産業競争力強化を目指して」
（一般社団法人国立大学協会、一般社団法人技術同友会等との共催）

１．開催趣旨・目的

産業界における女性技術者のエンパワーメント推進には、企業トップと組織管理職の深い理解とリーダーシップの強化が肝要である。そのための継続的な啓発活動の一環として、企業トップ並びに中間管理職を対象に女性技術者のエンパワーメント推進のためのセミナーを開催し、啓発活動として優秀な企業を表彰する制度や女性技術者のエンパワーメントに関する企業の達成度を測る仕組みなどの促進施策を紹介・提言する。また、産業界で必要とする女性技術者の母集団を拡大しうるよう産業界の大学等への支援のあり方についても併せて紹介・提言する。

２．シンポジウム等の名称・テーマ

女性技術者のエンパワーメント推進に関するシンポジウム
「女性技術者登用による産業競争力強化を目指して」

３．日時・場所・参加者数

・平成 26 年 2 月 12 日（水）13：00～17：00
・一橋講堂
・364 名

４．プログラム

＜開会挨拶①＞別府　充彦氏（内閣府大臣官房審議官）
＜開会挨拶②＞濵口　道成氏（国立大学協会　副会長）
＜開会挨拶③＞立川　敬二氏（技術同友会代表理事）
＜事例発表①＞ 神元　佳子氏（キリン株式会社　人事部　多様性推進室　室長）
＜事例発表②＞ 小谷　美樹氏（株式会社リコー　人事本部　人事部採用センター　所長）
＜事例発表③＞ 茅原　英徳氏（株式会社ＮＴＴデータ　人事部　ダイバーシティ推進室長）
＜事例発表④＞ 桐竹　里佳氏（日産自動車株式会社　ダイバーシティディベロップメントオフィス　室長）
＜事例発表⑤＞ 林　雅子氏（アサヒビール株式会社　人事部キャリア開発部ダイバーシティ担当部長）
休憩
＜パネルディスカッション＞ ●コーディネーター

國井　秀子氏（芝浦工業大学学長補佐、男女共同参画推進室室長、大学院工学マネジメント研究科教授） ●パネリスト ①伊藤　源嗣氏（株式会社 IHI　相談役） ②佐々木則夫氏（株式会社東芝　取締役副会長） ③池　　史彦氏（本田技研工業株式会社　代表取締役会長） ④濵口　道成氏（国立大学法人名古屋大学　総長） ⑤羽入佐和子氏（国立大学法人お茶の水女子大学　学長） ⑥小川　　誠氏（経済産業省　大臣官房審議官　雇用・人材担当） ⑦有松　育子氏（文部科学省　大臣官房審議官　生涯学習政策局担当）

５．参加者からの主な意見

・社会全体の考え方を変えるための取り組みを産学官一体となって進める必要があると感じた。将来に向けて変革しなければ何も変わらない、スピード感を持っての取り組みが必要だと思う。
・先進的取り組みがよく理解でき、今後の参考にもなるのでこのような企画を継続願いたい。このようなイベント開催自体に意義があると強く感じた。
・各分野の話は大変勉強になり、良い刺激になった。こうした企画を繰り返し行うことで、社会の変化と取り組みが促進される筈である。
・ロールモデルや施策等盛り込んだ事例集のようなものを作成し、普及活動を展開してもらいたい。
・女性が、様々なライフイベントによって、仕事をセーブしたりキャリアが止まってしまうことがある。管理職として働きたい女性もいると思うが、家庭を優先させて仕事の負担を減らしたいと考えている女性もいる。そういった、女性のいろいろな考えを尊重し、それぞれの希望にあった待遇を実現できるようにして欲しい。
・なぜ女性が工学に魅力を感じ続けられないのか、あるいは感じ続けられたのかを突き詰めると解が見えてくるのではないか。
・技術者＝理系という考え方に疑問。理系に所属しなくても、科学や技術が好きという女性はたくさんおり（潜在的リケジョ）、技術者として活躍できる領域を周囲が広げていく努力が必要ではないか。大学側においても、文系でも数学や物理の講義を受けて卒業できるようにカリキュラムや単位制度を見直すべきではないか。

６．シンポジウム等を通して得た成果（効果）と課題

産業界における女性技術者のエンパワーメント推進には、企業トップと組織管理職の深い理解とリーダーシップの強化が肝要であること、また女性技術者のエンパワーメントに関する企業の先進的取り組み事例が情報共有されたことで、参加者が置かれた個々の環境に置き換えて今後の具体的取り組みについて考える良い契機となった。

７．今後の課題

シンポジウムの感想としては、全体を通して7割から8割の参加者が「とても良かった」「良かった」と回答している。ただ、自由意見欄では、「中小企業の例を紹介してほしい」「事例発表が

長すぎる」「パネルディスカッションの時間が短すぎる」「質疑応答がないのは不満」といった意見が不満点として挙げられていた。継続した開催を期待する声も多く挙げられており、次回開催の際にはこれらの意見を反映させた企画としていくことが好ましいと考える。

以　上

内閣府　男女共同参画局　総務課
〒100-8914 千代田区永田町 1-6-1　TEL：03-5253-2111(内線 37522)　FAX：03-3581-9566